11/27（日）
朝日

新・土佐日記

ドイツ人と共通する酒・議論好き

ドイツから帰国してわずか八カ月で高知に転勤となったので、とかく両者を比較しがちである。ドイツでまず驚いたのは、長女の小学校のPTAの集まりが夜、酒場で開かれることであった。母親たちが、先生を囲んでビールをやりながら、それぞれいいたいことをいう。「こんなことはまず日本ではなかろう」と思っていたのは、小生の認識不足で、高知へ来て似たようなことが、堂々と行われているのには驚いた。国際的レベルの土佐のハチキンの面目躍如といったところか。

ドイツ人も酒を飲む。しかも議論が大好きだ。街のビアホールは、昼間からワイワイいいながらソーセージを肴（さかな）にジョッキを傾ける人で満員だ。タキトゥスの「ゲルマニア」によれば、「彼らは、飲酒に対して節約がない。もし彼らの欲するだけを給することによって、その酒癖をほしいままにせしめるなら、彼らは武器によるより、はるかに容易に、その酒癖によって征服されるであろう」と書かれている。一方、「土佐日記」の紀貫之送別会における土佐の人びとの飲みっぷりとその酔態も、潮を待つためとはいえ、相当のものであり、これまた一、〇〇〇年後の現在も、まるで変わっていない。「上手に飲んで長生きしよう」というようなキャンペーンを県がしなければならないような状況である。

「ドイツ人とは議論するな」という。勝てっこないというのが、その理由である。論理的で、自己主張が強く、かつ意地っぱりである。ドイツ人が議論しているのを聞いていると、まるで喧嘩（けんか）だ。とにかく絶対に譲らない。これに対して、土佐人的性格の典型は、いわずと知れた「いごっそう」である。

以上は、土佐人とドイツ人の共通するところであるが、実は全然違うところもある。

たとえば、ドイツは地方分権の国であり、多極分散型国家である。これに対して、高知市に人口が集中し「お城下意識」の強いといわれる高知県は、むしろパリを中心とするフランスに似ている。また、ドイツ人は、強烈な個性を有する半面、規則や秩序を愛し、先鋭に分かれた意見を調整し、これを克服して共通の理解を生み出していく団結心と組織力に富んでいる。そして、この美点を生かして東西両ドイツは、今日ともにそれぞれの陣営において最優等生と評価されるに至っているのである。この点、土佐人はどうであろうか。二十一世紀にはばたく高知の今後の課題の一つであろうと思われる。

（県保健環境部長
片木　淳41歳
＝滞在一年八カ月）

投稿歓迎　県外や外国から高知に来て暮らしている方。テーマは自由。約千字。住所、氏名、職業、電話番号を書いて下さい。掲載分には薄謝贈呈。